

滋賀県大津市（国内 61 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 5 年 1 月 19 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は山地からの斜面丘陵地に位置し、周囲は住宅地、棚田・水田に囲まれており、竹林と隣接していた。
- ② 調査時、当該農場から約 300m 離れた池にマガモ 6 羽を確認したが、その他周辺の水場にはカモ類は確認しなかった。
- ③ 当該農場は低床式開放鶏舎の成鶏舎及び大雛舎の計 2 鶏舎があった。成鶏舎は通路で連結された南北の 2 棟で構成されており、成鶏舎及び大雛舎のいずれの棟もひな壇式 2 段ケージが 4 レーン設置され、発生時いずれも採卵鶏の成鶏が飼養されていた。衛生管理区域内にはこのほか集卵室及び廃舎となった中雛舎が存在していた。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、1 月 18 日午前の健康観察及び集卵作業時に、成鶏舎の農場入口から一番離れた南側の向かい合わせ 2 レーン（通報時 547 日齢）の入口側ケージにおいて、5 羽まとまって死亡していることを確認し、平時から発咳等の呼吸器症状を呈している鶏が多かったが、死亡鶏がまとまっていたことから異変を感じ家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 農場全体で通常時の死亡羽数は 1 日当たり 0～3 羽とのことだが、死亡鶏の記録は取られていなかった。
- ③ 飼養管理者によると、当該鶏舎において産卵数の低下や異常卵、食欲低下等の異状は認められなかったとのこと。
- ④ 調査時（1 月 19 日午後）は、発生ケージ付近において複数の死亡鶏や沈鬱状態の個体が確認された。その他の鶏に異状は確認されなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では飼養管理、集卵作業等の全ての作業を農場主を含む従事者 2 名で行っていたとのこと。
- ② 作業内容及び鶏舎ごとの担当は設けていなかったとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 農場入口には立入禁止看板等の設置がされておらず、衛生管理区域の境界が不明瞭であった。
- ② 飼養管理者によると、農場入口に月 1～2 回程度石灰を散布し、車両が農場に入る際は石灰帯を通行することで車両消毒を実施していたとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、従業員は出勤後、集卵室併設の倉庫で農場専用長靴に交換し、私服の上から農場専用の上着を着用し、手指消毒を実施又は使い捨て手袋を着用していたとのこと。
- ④ 飼養管理者によると、各鶏舎及び集卵室に入る際は、踏込み消毒槽（界面活性剤入り塩素系漂白剤、3 日に 1 回程度交換）による靴底消毒を実施していたが、鶏舎専用長靴への交換、手指消毒は実施していなかったとのこと。
- ⑤ 飼養管理者によると、飼養管理者以外の日常的な来場者は飼料業者のみで、飼料業者は 2 週間に 1 回程度の来場の際、衣服・靴の交換、手指消毒は実施していなかったとのこと。
- ⑥ 飼養管理者によると、11 月中旬以降各鶏舎周辺には消石灰を定期的に散布していたとのこと。
- ⑦ 飼養鶏の健康観察及び集卵作業は毎日 1 回実施しており、健康観察時に確認された

死亡鶏は農場内に設置されている発酵処理機で処理をし、鶏糞とともに堆肥化していたとのこと。また、鶏舎内に死亡鶏を放置することもあり、調査時、発生鶏舎の入口付近及び通路には多数の死亡鶏が放置されていた。

- ⑧ 飼養管理者によると、鶏糞は、月に2～3回、鶏舎の列単位で重機を用いて除糞し、鶏糞搬出車両で農場から約800m離れた堆肥舎に搬出し、堆肥化後は自己所有の畑に散布していたとのこと。衛生管理区域出入り時の車両消毒は石灰帯の通行によるとのこと。直近の運搬は12月20日。なお、調査時、発生鶏舎の入口及び通路には大量の鶏糞が堆積していた。
- ⑨ 飼養鶏への給与水は井戸水を未消毒で使用しており、井戸の上部は覆われていなかった。
- ⑩ 飼料タンクの上部には蓋がされており、自動で給餌される仕組みとなっていた。自動給餌器の不具合で、鶏舎手前で大量の配合飼料が漏出していた。
- ⑪ 集卵は、インラインの自動集卵装置と手作業を併用して実施しており、発生ロットは手集卵だったが集卵室（GPセンター）への搬入は集卵コンベアで行っていた。集卵コンベアと集卵室の接続部に稼働時以外は板を設置していた。
- ⑫ 当該農場では、冬場は換気を行っておらず、夏場はファンを稼働させるとのこと。
- ⑬ 鶏舎壁の開口部には内側から順に5×4cmの金網、ロールカーテン、一部に1×1cm又は1×2cmの防鳥ネットが設置され、調査時、ロールカーテンは閉められていた。
- ⑭ 当該農場では、以前は4～5か月に1回、80～130日齢程度で導入し、次ロットの導入に合わせて2年程度を目安に廃用していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で1年以上出荷及び導入を実施していなかった。直近の導入は2021年11月、出荷は2021年10月とのこと。
- ⑮ 成鶏舎では鶏舎ごとのオールイン・オールアウトは行っておらず、通路を挟んで向かい合わせの2レーンずつで4ロットが飼養されていた。ロットごとの出荷後は簡単に清掃を行った後、次のロットを収容していた。発生時に大雑舎で飼養していた採卵鶏は、成鶏舎に収容しきれなかった1ロットの一部を飼養していた。

5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、農場内で日常的にカラスやスズメが確認されており、農場周辺の竹林がカラス類のねぐらになっていると思われるとのこと。調査時には、農場内でカラス類及びスズメ、ツバメを目視で、ヒヨドリを鳴き声で確認した。
- ② 農場内では、野鳥のほかに、ネコやイタチを見かけることがあったとのこと。
- ③ ロールカーテン外側の防鳥ネットは各鶏舎の全周を覆っておらず、また防鳥ネット及び外壁に破損が複数あった。ロールカーテンにも破損箇所があり、5×4cmの金網がむき出しになっている箇所が複数あった。調査時、一部の金網のみでほこりが付着しておらず、野鳥が出入りしていた可能性が考えられた。また、屋根と軒との間にスズメが通れる隙間があった。
- ④ 鶏舎内においてもカラス類を目撃したことがあるとのこと。鶏舎内で野鳥を確認した場合には、鶏舎の破損箇所について修復を行っていたとのこと。直近では、1月上旬に鶏舎の破損の修復を行ったとのこと。
- ⑤ 集卵室入口にはネズミ対策として粘着シートを設置しており、ネズミが捕獲されるたびに交換していたとのこと。なお、鶏舎内には設置されていなかった。

(以上)